

ビュヒアー「国民経済の成立」の編成について

淡 川 康 一

此の拙稿の目的は、筆者が近く公刊を企図している、ビュヒアーの「国民経済の成立」に関する研究の一端で、該書の編別を検討せんとするにある。カール・ビュヒアー (K. Bücher) の残された、数多くの学績中、特に経済学的世界的文献の一として治ねく人口に膾炙している「国民経済の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft) は、其の第一集の邦訳者権田保之助氏に依り、「経済学の文献に素人なる人々にとつては『国民経済の成立』てふ名は本書全体の概念を把握するに少々不便の感がある。茲に於て私は『経済的文明史論』という原書の何処にも表わされて居ない全然別の名を以て之に冠することにした。」とせられたが(ビュヒアー著・権田保之助訳・経済的文明史論・改刻第二版・訳者序一―二頁)、原著者の真意を深く忖度するに於いては、やはり原名通りに「国民経済の成立」と云う標題が適當である様に思われるのである。其は原著者が此の第一集の、第一版より第八版に至る序文に於いて、次の如く述べているのにも分るのである。即ち「本書に収める処の講演及び論文は、種々の機会に際して、大抵は専門家だけで成立していかない会合に於いて試みられたものである。従つて一冊の書籍の章の様に読まれるのは、著者の本意ではないのである。各断章何れも独立しているものであり、同一の行想にして、

仮令其の觀察の側面を異にするものがありと雖も、時に幾度か各所に繰返して現われているものが、少くないのである。

然し乍ら各章が其の対象と研究方法とに於いて相互的、内面的に相関連しているものであることは、読者の容易に了解せられる処であろう。総ての章を貫く根本思想は、第三章として収録された講演（筆者註・氏の残した、數多くの学績中、特に氏の名声をして不朽ならしめた雄篇「国民經濟の成立」Die Entstehung der Volkswirtschaftを指す。）の中に述べられているが故に、此の標題を取つて、以て全篇に冠せしめたのである。此の根本思想は、殆ど言う必要がない如くに、此処では其が把握されて来た処の、簡截な形式に於いては表現されていないのである。若しかかる推敲を施すに於いては、精確と、而して資料の豊富とに於いて獲得するに至つたものを、其の概観性に於いて失う所あることを虞れたからである。」。

之に続いて原著者は次の如く思想を展開しているのである、即ち「全卷を支配しているものは、經濟史的進法の合法則的経過を統一的に解釈しようとする意図と、而して事実上立脚する材料を同一の研究方法を以て処理せんとする企図とである。此の両方面は私が大学に於いて講座を担当した以来試み来た処であり、而かも研究を継続し行く裡に、私の脳裡に益々牢固たる根柢を植え付け、私の予期した通りに漸く円熟化し来りしものに外ならぬのである。而して今此処に之を公表せんとするに當つて、私は古き時代の、私の聴講者から幾度か述べられた希望に従つて、今日となつては私の手によつてのみ成され得可く、而かも私自身すら尙お其の不完全を最も痛切に感じつつある形式に訴うるに至つたのである。」。

ここに紹介した、最後の一節は、稍々漠然たる表現に於いてではあるが、氏の文名をして世界的たらしめた、

其の独自の經濟發展段階階説に就いて述べられていることは、明かである。經濟史を学び、經濟發展段階階説に關して教えられる時、等しく耳にする処の、氏の立定にかかる經濟發展段階階説、即ち財貨の生産、消費の關係、換言すれば財貨が生産者から消費者に至るまでに經過す可き道程の長短によつて觀察することが、最も適當であると説くのである。かくて此の觀察點に立脚して論ずる時は、一般經濟の發達、殊に中央歐羅巴、西歐羅巴の國民に於ける經濟の發達は、第一期 封鎖的家内經濟の階段 (Die Stufe der geschlossenen Hauswirtschaft)、第二期 都市經濟の階段 (Die Stufe der Stadtwirtschaft) 及び第三期 國民經濟の階段 (Die Stufe der Volkswirtschaft) の三階段に分つことが出来ると括約するのである。之れ生産及び消費の關係から見た階段説として、今尙お多くの人々によつて支持されているものである。

処でここに問題とす可きは、此の段階説を研究對象にした論稿が、何時、又何処で發表されたかと云うことである。「國民經濟の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft) の第一集に収録された論稿は、第一篇の「原始時代の經濟狀態」(Der wirtschaftliche Urzustand) から最終篇の「国内移住及び都市制度の文化史的意義」(Die inneren Wanderungen und das Städtewesen in ihrer entwicklungsgeschichtlichen Bedeutung) に至るまで集計一二篇、何れも其の發表された時期及び方法に就いては、附記される処がないのである。然るに同書の第二集はと見れば、其の収録された論稿集計一六篇の中で、第四篇の「大量生産の法則」(Das Gesetz der Massenproduktion)、第六篇の「基督降誕祭市場に於ける家内工業」(Die Hausindustrie auf dem Weihnachtsmarkte)、第九篇の「新聞に於ける匿名主義」(Die Anonymität in den Zeitungen)、第一〇篇の「經濟上の広告」(Die wirtschaftliche Reklame)、第一二篇の「家政予算案か經濟計算か」(Haushaltungsbudgets oder Wirtschaftsrechnungen?)、第一三篇の「利益代表」(Die

Interessenvertretung)、第一四篇の「近代都市自治体の経済的職能」(Die wirtschaftlichen Aufgaben der modernen Stadtgemeinde)、第一五篇の「独逸に於ける商科大学運動」(Die Handelshochschulbewegung in Deutschland)、第一六篇の「独逸国に於ける大学の新設」(Die Neugründung von Universitäten im Deutschen Reich)、是等九篇の論稿には、何れも其の発表された時期及び方法が添記されているのである。而して此の労作の第一集及び第二集を通じて、原著者が其の眼目、骨子とも見る可きものとしてゐる、第二集に収められた、其の第三篇の「国民経済の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)に就ては、上述の様な事情で、元より其の発表された時期及び場所に関して、何等明記する処がなうのである。唯前にも引用した、本書第一版から第八版に至る、原著者の序文中、「全巻を支配してゐるものは、経済的進化の合法的経過を統一的に解釈せんとする意向と、事実に基ける材料を同一様の研究方法を以て取扱わんとする計劃とである。而して此の両方面は、私が大学に於いて講義を開始せし以来、試み來つて、而かも私の脳裡に愈々確固たる根底を植え付け、私が予期せし如くに漸く円熟化し來つたものに外ならぬのである。」と述べられてゐるのを見れば、大学に於ける講義ノートを整理、推敲してまとめられたものと推測することが出来るのである。而して同じく此の序文の中の、最初の個所で、「総てを貫く根本思想は第三の講演に於いて述べられてゐる故に、此の標題を取つて全篇に冠せしめ得たのである。」と記されているし、又続いて、「全篇を支配してゐるものは、経済的進化 (die wirtschaftsgeschichtliche Entwicklung) の合法的経過を統一的に解釈せんとする意向と、事実に立脚する材料を同一様の研究方法を以て取扱わんとする企図とである。」と叙せられてゐることから推断すれば、此の論稿が第一集の第三篇を成す「国民経済の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)を指すことは、明白である。蓋しこのことは、第三篇の劈頭に氏の所謂経

済的進化の本質を最も精彩を着けて説明し、「発展段階」(Entwicklungsstufen)「経済的進化過程」(wirtschaftsgeschichtlicher Entwicklungsgang)と云言葉を繁用していることから見ても、云い得るのである(第一集、第一六版、八七頁参照)。

然らば次に問題とす可きは、此の第三篇を成した最初の草稿が、何処の大学での講義案であるかと云うことである。氏の学績を中心に、其の身の雑事を交え綴った「自叙伝」(Karl Bücher: Lebenserinnerungen. 1. Bd. 1847-1890. Tübingen 1919)を繕読して行く裡に、此の書の四五二頁に以下の様な記事を見出したのである、「然し乍ら私は直ちに当初から、次の様なことを疑念の外に置かなければならぬ様に確信したのであった。即ち私は何は扱置きライプチヒ(Leipzig)での経済学の教授として考えられ、而してかかるものとして見做される様に欲すること、之れである。為めに私は私の就任講演として常に国民経済学の中心点に立つて来た処の對象である分業と云う題目を撰定したのであった。此の講演は後程私の「国民経済の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)に収められたのである。而して此の書の第一版はすでに一八九三年に刊行せられ、之は此の講演と同様に私を経済学者として示そうと云う目的に役立つたのであった。此の書物は講演及び論文を集めたものであるが、然し又恐らく充分独自の内容を有していたに相違ないのである、蓋し其は十一版となって流布され得たからである。本書は私のライプチヒ(Leipzig)での活動の出発点となつて来たと同様に、又私のカールスルーエ(Karlsruhe)での仕事の結末としても見做されるのである。」氏がカールスルーエ(Karlsruhe)からライプチヒ(Leipzig)へ転任したのは一八九二年のことであり、今引用した、氏の自叙伝中の一節でも分る様に、すでに其の翌年に「国民経済の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)が刊行されているのであるから、此の論稿は少くともカールスルーエ

(Karlsruhe) の大学での講義案としてまとめられていたものと推断することが出来るのである。然し其の後引き続いて度々推敲、精研せられていることは、前にも引用した氏のものにした、本書の序文中の、「全講演を支配しているものは、経済史的進化の合法的経過を統一的に解釈せんとする意向と、而して事実に基づける材料とを同一様の研究方法を以て取り扱わんとする企図とである。此の両方面は私が大学に於いて講義を開始して以来試み来つて、而かも研究を継続し来るや、私の心底に愈々確固たる根底を植え行き、私が予期した様に漸く円熟化し来りしものに外ならないのである。而して今此処に之を公表せんとして、私は古き時代の、私の聴講者より幾度か述べられた希望に従つて、今日に於いては私の手によつてのみ為され得可く、而かも私自身すら尙お其不完全を最も激しく感じつつある形式に訴うるに至つたのである。」と述べられた一節からもよく分る処であり、又其の第一集・第一六版の九七頁に、「家内経済」(Die Hauswirtschaft) を詳述した個所に、同じく氏の労作として有名な「労働と律動」(Arbeit und Rhythmus) の第五版が引用されていることから、よく認め得るのである。蓋し筆者の蔵する、此の書籍の第三版の原著者序文は、すでにライプティヒ (Leipzig) 転任後の一九〇一年の筆になつてゐるからである。

さて「国民経済の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft) が一種の論文集であることは、上采屢々説いた処である。凡そ論文集の形式としては、首、中、尾に次第が有り、照応が有り、所謂聯作の形が採らる可く、得るに随つて漫然と雑纂されるものではない。本書は此の点に於いても、最も苦心が存している様である。其は此の第一版から第八版に至る原著者の序文中に、「此の小冊に収める処の講演は、専門家のみを以ては構成されてゐない学会に於いて、種々の機会に行いし所のものである。従つて各講演にして一著書の章として読まれること

は、著者の本意ではない。各講演何れも独立しているものにして、同一行想の、仮令其の考察の側面を異にするにも、時に幾度か各処に繰返して現われて来るものが、ないではない。

然し各篇章が其の対象と研究方法とに依じて相互内面的に相関連し合っていることは、読者の直ちに了解される処であろう。」と述べられていることから分るし、又此の第一六版の自序中にも、「一九一七年の七月に第二版が刊行されて以来、唯僅かの個所についてだけ大なる改訂を加える機会が、あったのである。講演及び論文の当時約束された、第二集は、其の間に出版されたのである、而して今や第七版となつて発行されることになつてゐる。私は此の集に於いて、私が時を経るに随つて色々の処で公表し、又は単に私の聴講者の為めに書き下ろした、総ての当該問題を統括したのである、而して斯様にして一六篇が集録されたのであるが、其の、全体の範圍は第一集を尙お凌駕してゐるのである。」と叙述されている通り、第一集、第二集共に、其の全体としての統一、総括には苦心されたのである。

先ず第一集の内容を其の編成順に見れば、次の如くである。第一章の「原始時代の經濟狀態」(Der wirtschaftliche Urzustand)に初まり、第二章の「自然人の經濟」(Die Wirtschaft der Naturvölker)、第三章「國民經濟の成立」(Die Entstehung der Volkswirtschaft)、第四章「工業經營制度の史的進化」(Die gewerblichen Betriebsysteme in ihrer geschichtlichen Entwicklung)、第五章「手工業の没落」(Der Niedergang des Handwerks)、第六章「新聞の起源」(Die Anfänge des Zeitungswesens)、第七章「聯力と共力」(Arbeitsvereinigung und Arbeitsgemeinschaft)、第八章「分勞」(Arbeitsteilung)、第九章「労働組織と社会階級組織」(Arbeitsgliederung und soziale Klassenbildung)、第一〇章「五千年來の大都會の型式」(Grossstadt-Typen aus fünf Jahrtausenden)、第一一章「中世都市の社会組

織」(Die soziale Gliederung einer mittelalterlichen Stadt)を経て、第一二章の「国内移住及び都市制度の文化史的意義」(Die inneren Wanderungen und das Städtewesen in ihrer entwicklungsgeschichtlichen Bedeutung)を以て終つてゐるのである。次に第二集の内容を其の編成順に就いて見れば、先ず第一章の「贈与、貸与及び招請労働」(Schenkung, Leihe und Betarbeit)から順次第二章「森林と経済」(Wald und Wirtschaft)、第三章「農業」(Landwirtschaft)、第四章「大量生産の法則」(Das Gesetz des Massenproduktion)、第五章「工業史の一断片」(Ein Ausschnitt aus der Gewerbeschichte)、第六章「基督降誕祭市場に於ける家内工業」(Die Hausindustrie auf dem Weihnachtsmarke)、第七章「運輸」(Der Transport)、第八章「商業」(Der Handel)、第九章「新聞に於ける匿名主義」(Die Anonymität in den Zeitungen)、第一〇章「経済上の広告」(Die wirtschaftliche Reklame)、第十一章「消費」(Die Konsumtion)、第十二章「家政予算案か経済計算か」(Haushaltungsbudgets oder Wirtschaftsberechnungen?)、第十三章「利益代表」(Die Interessensvertretung)、第十四章「近代都市公共団体の経済的機能」(Die wirtschaftlichen Aufgaben der modernen Stadtgemeinde)、第十五章「独逸に於ける商科大学運動」(Die Handelshochschulbewegung in Deutschland)を経て、第一六章の「大学の新設」(Die Neugründung von Universitäten)を以て終つてゐるのである。

今是等第一集、第二集の各章を通じて、其の編成上の諸関連を詳述する紙面を持ち合さないのであるが、若干の著例を挙げて、此の点を少しく検討して見よう。

先ず第一集の首篇には、「原始時代の経済状態」(Der wirtschaftliche Urzustand)を置き、続いて其の第二篇として「自然人の経済」(Die Wirtschaft der Naturvölker)を編入し、又第二集の首篇にも、同じく自然人の経済状態

を取り扱つた「贈与、貸与及び招請労働」(Schenkung, Leihe und Bittarbeit)と題する一文が、収められているのである。又其の經濟發展段階説を見ても、其の三時代、即ち既述の封鎖的家内經濟の段階 (Die Stufe der geschlossenen Hauswirtschaft)、都府經濟の段階 (Die Stufe der Stadtwirtschaft) 及び國民經濟の段階 (Die Stufe der Volkswirtschaft) の外に、尙お經濟發達以前の狀態として、個人的食料探索時代 (die Stufe der individuellen Nahrungssuche) なるものが、説かれているのである。而して此の段階は現今知り得可き自然人の、最も幼稚な生活狀態を指示するものではなく、是等自然人の生活狀態の中から、最も原始的な生活方法によつて生じたものと考へられる諸般の特徴を抽出し、是等の特徴から推論して、今日の自然人よりも一層遡及した原始人類の生活狀態を、觀念の上で想定、構成したものである。其の説く処に拠れば、此の段階に於いては、各人は自己の肉體以外には何等の武器、道具を有せず、或る種の動物と同様に、同類と共に一定の地域内を漂泊し、手と共に足をも巧妙に使用して、物を捕え、樹木に攀ち登り、男女共に総て手を以て捕え、或いは爪を以て地中より掘り出し得る小動物、草根樹実等を其のまま食料としたものであつて、彼等は未だ一個の社會を組織するに至らず、大小の群を存して唯個人的に食料を探索せる生活を営むに過ぎないのである (K. Bücher: Die Entstehung der Volkswirtschaft. Erste Sammlung. 16. Aufl. S. 9 ff., 27, 30, 38)。

思うに此の原始經濟狀態に於ける行為たるや、一定の秩序計劃に基いて支配されたものではないから、未だ經濟なるものが發生するに至らなかつた時代である。而かも此の段階を以て最初の經濟段階たる封鎖的家内經濟の前段階として特に設けたのは、抑々如何なる理由に拠るのであるか。現に氏自身も、「歐羅巴の文明人が其の歴史の第一歩を踏み出したのは、実に統一的家内經濟であつたと云うことは、古代の、あらゆる事実より立証し得

る処である。而かも斯の如き、統一的なる家内経済の組織が彼の稍々進歩せる自然人の間に於いてすら発見することが出来ないのは、事實の証する処、何れも皆然らざるなき有様である。家族の共同的家計は彼等野蛮人の尙お未だ夢想だもし得ざる処であり、各人相互の間には寔に深い溝渠の穿れたものがあり、かくして彼等は吾人に取りつては怪訝に堪えない経済的独立生活を営んでいるのである。」として、此の前段階が本質的に封鎖的家内経済と異なることを述べているのである（a. a. O. Erste Sammlung, S. 37-38.）。故に之は原始経済状態と云わんよりも、むしろ原始非経済状態とも称す可きであろう。而かも更らに続けて、「勿論斯くの如き各人孤立の状態に心を奪われ、為めに労働及び相互扶助と云う社会の結合的要素の存在していることを看過してはならぬのである。又それと同時に、此処に支配しつつかある遠心的勢力を誇大視せざる様に努めなければならぬが、是等一切の現象は一箇の共通的根源より来ていると云うことは、否定し得ないのである。而して其の、一箇の共通的根源とは何であるか。其は實に何千年来彼等自然人の何れによつても行われ来りし個人的食料探索と云う事實である。

吾人が着手した、此の研究、即ち極めて異なる種族と、而して甚しく隔絶している文化段階とに属する民族を総括して、其の経済現象を抽出、推断し来れる、此の研究を學術的に確定する根拠は、寔に此の点に存するのである。

斯くの如き研究方法は、経済学並びに其の他の、人類社会に関する科学に於いて、其の正当なることを立証し得る処であり、彼の人類学が、宛然と大なる我楽多小屋の其の如く、漫然として蒐集し、雑然として統一を付することがなかつた、数多くの事實の中から、多数のものを抽出し、之に或る共通の名称を付し、簡単な方法によつて其を説明しようとするのである。殊に経済学に就いて考えるならば、其は従来の、勝手に構想し、文明人の

抽象を以て假想した野蠻人と云う、架空の人間を消失せしめ、之に代うるに、事實に立脚する人間を登場せしめ、かくして、其処に貴ぶ可き收穫を期待せしめ、愈々精密なる觀察を遂げることが出来る様になるのである。」と結んでゐるのである (a. a. O. Erste Sammlung, S. 38)。

以上、氏の「原始時代の經濟狀態」及び「自然人の經濟」を特に考察の対象にする理由を、氏自身の立言によつて紹介したのであるが、筆者は此の問題に關して尙お少しく検討を加えて見よう。其は氏の、經濟に就いての根本思想が、人類の經濟は交換より初まるものに非ずして、むしろ自給自足を主として営まれたものであり、其が漸く流通經濟を形成するに至つたのは、近代國家より以前に遡り得るものではないと云う學說に帰結し得るのである。此点に就いては、第一集、第二集の各篇に隨處述べられてゐるのであるが、其の代表的なものとして、次の一節を引用すれば了解される、「吾人は此処に断言す、國民經濟的意味の商業、換言すれば利潤を得て転売せんとする目的を以て規則的且つ職業的に財貨を購入することは、決して自然人の間に存せざる処であると。吾人が阿弗利加に於いて土人にして商売に従事しているものに接することがあるが、其は歐羅巴の人、或いは亜刺比亜の商人から刺激されて、始めて生じた周旋業でなければ、蘇丹の如き半開地に於ける現象と見る可きものである。而して其以外の地方に於いては、一般土人間に行われつつある交換は唯種族との間の交換取引のみである。而して其は天産物分布の不均等なるが為めか、又或いは各種族間に於ける生産技術の發達に差異の存するが為めである。同一種族内各員の各個別經濟の間には、規則的な交換交通なるものを見るのが出来ないのである。蓋し彼等は何れも同一の財貨を生産し、従つて職業的社会組織なるものを欠いてゐるからである。斯くの如き職業的社会組織のない時に、何を苦しみ各家族間に相倚り相助けて交換交通を爲す必要があるであらうか。」

(K. Bücher : a. a. O. Erste Sammlung, S. 60-61)° 更に又交換其のものの基源に遡つても、次の如く述べられてゐるのである。「原始人は生れながらにして交換の性向を持たざるのみならず、寧ろそれに対して嫌悪の情さえ抱いてゐるのである。交換する『Tauschen』と云ふことと欺す『täuschen』ということとは、古語に於ては同一のものであつた。之は一般的に認められてゐる価値の尺度を欠いてゐるが爲めに、交換を為せば欺されるかも知れないと云ふことを慮る要があつたことに基くのである。そればかりではなく、己が額に汗して得た生産物は、之を作り出した人の身体の一部とも見る可く、之を他人に譲渡すると云ふことは、己が身体の一部を分割して人に与えるのと同様であつて、やがては悪魔に魅入れられる様になるものと考えられていたのである。斯くの如くなるが故に、中世の可なり末期迄も、交換は政府の保護、立会人の決議の下で、象徴的な方式を使用して、成立してゐたのに過ぎなかつたのである。」(K. Bücher : a. a. O. Erste Sammlung, S. 92-93)° 此の引用文で特に注意すべき箇所は、交換のない、自給自足の経済が中世の、可なり末期迄も継続してゐたとする見解である。人類の経済組織は時代が経過すると共に漸次粗より精に進むことは認めるが、其の原始状態から中世の末迄一貫して不変であつた形態は、生産から消費に到達する迄の全過程を同一の経済単位の中で経過せしめる処の自給自足の経済であつたと見るのである。此の見解に対しては、元より正に相反する見解も多々あり、而して氏が特に其の駁論の対象にしたのは、英国正統学派ではアダム・スミス (Adam Smith) とデヴィッド・リカルド (David Ricardo) の所説であり、独逸歴史学派ではフリードリヒ・リスト (Friedrich List) とブルーノー・ヒルデブランド (Bruno Hildebrand) の学説であり、更にワグナー (A. Wagner) 及びチューネン (H. v. Thünen) の理論に対しても、夫々一矢を放つてゐるのである。

先ず前者に就いては、次の如く論ぜられてゐる、「アダム・スミス(Adam Smith)とリカルドー(Ricardo)とが抛つて以て其の旧式の学説を築き上げた状態は、分業的交易経済の状態、換言すれば言葉の、真の意味で言う所の国民経済の状態である。即ち各人は己が使用する財貨を自から生産するのではなくして、他の人の使用する財貨を生産し、其を以て己が必要とする、各種の財貨及び業務と交換する状態であつて、約言すれば、一個人を支持す可く多数人、又は人類一切の協力を必要とする状態である。かかる状態を前提としてゐるのであるから、英國の経済学は実は流通経済論たるに過ぎずして、分業、資本、価格、労賃、地代、資本利潤の現象及び其の法則が其の、主なる内容を占め、生産論、特に消費論に至つては、之を取扱ふこと、あたかも継子の如きものである。一切の注意は財貨の流通に向けられ、財貨の分配も亦此の中に合併されてゐるのである。

曾ては交換のない社会状態があり得たと云ふことは、彼等の夢想だも想像し得ざる処であり、時としてかかる状態を学術研究の方法として仮定することがあるが、其は却つて荒唐無稽なる虚構に墮して、人の嘲笑を買うに過ぎないのである。普通彼等は原始状態よりして直ちに複雑なる流通交換の事実を演繹してゐるのである。アダム・スミス(Adam Smith)曰く、人類は交換の天分を有するものにして、分業すら尙お其の結果として現われ来るものなりと。リカルドー(Ricardo)は原始時代の狩猟民と漁撈民とを以て二個の資本主義的企業家となし、彼等の間に労賃の支払い、資本利潤の獲得ありと説き、彼等の生産費及び生産物価格に高低の現象ありと述べてゐるのである。」(K. Bücher: a. a. O. Erste Sammlung, S. 89-90)。更らに第二集の巻首に収載された、既述の「贈与、貸与及び招請労働」(Schenkung, Leihe und Bitarbcit)と題する論稿の劈頭にも、次の如く叙せられて同一の思想が展開されてゐるのである、曰く「経済の研究に於いて往時に遡れば遡る程、経済の、日常の諸現象は比較

的若い起源の歴史的範疇であることを愈々明白に認めるのである。又古典派経済学が抱て以て其の理論を打ち建てた処の諸見解なるものは其の代表者達が夫々自分が直面した時代の経済事情から取材した処の合理的構成以外の何物をも其の内容としていないことに気付くのである。其は畢竟するに、『主人達の根底には自己の精神が支配し、此の精神には時代が反映されていたのである』と云う文句そのままであつた。此のことは財貨及び役務の交換に就いてすら該当するのであつて、之は彼等の考える処では総ての経済の、必要欠く可からざる現象であり、爲めに如何なる人間社会も交換なくしては考え得ないとするのである。

比較的新しい経済学者すらも尙お完全に此の見解から離脱するに至らなかつたのである。仮令彼等は貨幣交換の時期に対して実物交換の一時期を先行せしめてはいるが、実物交換の段階で彼等が理解する処の、最も明白に外に現われているものは、『沈黙貿易』の現象であつて、之はヘロドゥス (Herodotus) がカルタゴ人に関して報告している通りである、而して之は近代では屢々自然民族に就いて発見されて来たのである。宛かも交易流通なるものは他民族に対する關係に就いては必ず発達したに相違なかつたかの如くに、而して一の種族に属している人の内部にあつては、交易が初めて現われることは探求し得ざるかの如くに。』(K. Bucher: a. a. O. Zweite Sammlung, S. 3)。此処に引用した文の中で、「比較的新しい経済学者すら」と言つてゐるのは独逸歴史学派に属する人人を指していることは明白であり、特に其の中でもフリードリヒ・リスト (Friedrich List) とブルーノー・ヒルデブランド (Bruno Hildebrand) の所説に論及されていることは、既述の通りである。先ず前書に就いては、其の創案になる経済発展段階説を紹介して、「彼の経済発展段階説を立てる企図の中で最も著名であるのは、フリードリヒ・リスト (Friedrich List) によつて初めて立てられた段階である。其は生産の主要傾向によつて分類するも

のであって、依つて五個の時期を区劃し、之を以て温帯に棲息する各民族が、經濟上正常な状態に到達する迄に必ず経過せざる可からざる段階なりと説明しているのである、其の五時期とは曰く、(一)狩猟生活の時代、(二)牧畜生活の時代、(三)農耕の時代、(四)農業製造業の時代及び(五)農業製造業商業の時代即ち之れである。」と叙し、次いでブルノー・ヒルデブランド(Bruno Hildebrand)に移り、「ブルノー・ヒルデブランド(Bruno Hildebrand)は別種の段階を案出したのである。其は交換交通の状態を以て判別の標準と為すものであつて、依て以て三箇の進化段階を立定してゐるのである。即ち実物經濟、貨幣經濟及び信用經濟之れである。」と記してゐる(K. Bücher: a. a. O. Erste Sammlung, S. 88)°。尤もリスト(List)の説は其の五段階の最初に野蠻状態なるものが置かれてゐるのであつて、其の所説をそのまま引用すれば、次の如くである、「國民經濟は階段的に發展して行くものであつて、歐羅巴に於いて數世紀を通じて行われた過程は、野蠻の状態から牧畜の状態に進み、更らに農業の状態に入り、其から工業の状態に進むものである。」「國民經濟的發達に關しては、各國民の主要な發展的段階は、野蠻状態、遊牧状態、農業状態、農工状態、農工商状態と云うが如くに進むものである。」(Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister. III. 1922. S. 11, 63)°。續いでヒルデブランド(Hildebrand)の所説を其のまま紹介すれば、下の如くである、「凡そ交換の形式は、その始めに於いては、物と物とを交換したものであるが、更らに進歩すれば、貴金屬の交換媒介物、即ち貨幣を使用するに至り、最後に將來同一物又は同価物を返附す可しとの約束、即ち信用に對して貨物を交換するに至るものである。是等三種の交換様式に基いて、自然經濟、貨幣經濟及び信用經濟の三段階が發達するものであるが、各民族は何れも先ず第一の様式を以て、其の經濟發達の、最初の段階となすものである。貨幣經濟は民族が自己に必要とするよりも多くの財貨を生産し、すでに余裕ある状態に進展した時

に初めて到達するものであり、更らに信用経済は秩序ある貨幣交換が完全に発達したのに拘らず、尙お不便点の存することに気付き、支払手段を一層簡易ならしめんとする要求に依つて、行われて来たものである。而して是等の三段階は漸次発展し来り、年代を以て区劃し得可きものではないのである。」(B. Hildebrand: Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft. 1848. S. 276-279.)

リスト (List) の段階説は産業形態の一方面から觀察したものであるが、然し農、工、商と云うが如き重要な産業部門の発達消長は、自から経済社会全体の交換、分配及び消費の各方面にも亦大なる影響を与え、惹いては一般経済の性質に変化を来すことは明白である。否寧ろ一般の経済社会が交換と分配とを行つていればこそ、夫の産業形態が隆盛に赴くとも見られるのである。又ヒルデブランド (Hildebrand) の三段階説も、単に交換形式の進歩のみを云い表わさんがために立定されたものではなくして、彼は之を以て経済組織の変遷を解明せんとしたものである。其は次に引用する、彼の所説によつても明かに認め得るのである、「斯くの如く貨幣の使用は経済の発達に一時期を劃す可き、重大な変化を与えたのであるが、而かも経済の発達は此の貨幣を使用することに煩雜を感じるに至り、遂に之が使用の時間と労力とを省き、更らに貨幣そのものをも節約し、貨幣の実際上の媒介なくして、而かも一層多くの効果を挙げ可き信用制度の行われるに及んで、経済界の活動は一層敏活となり、多大の発達を遂げるに至つたのである。之を要するに、自然経済は人類を外面的、物質的の帯によつて相互に結合したものであるが、此の帯は貨幣経済の段階に至つて解かれ、自由清新な経済組織を現出し、新勢力と新生活との発展を要たのであるが、更らに信用経済に入つて、再び人類は精神的、道義的に結合されて来たのである。」(B. Hildebrand: Nationalwirtschaft, Geldwirtschaft und Creditwirtschaft, Jahrbücher für Nationalökonomie und

Statistik, 2. Bd. 1846, S. 1-24.)。先ず此の段階説で問題とす可きは、最初の時期である「自然経済」(Naturalwirtschaft)なる用語である。此の言葉の、通常の使用例としては、物々交換と自足経済との両者を包含するのである(E. v. Philippovich : Grundriss der Politischen Oekonomie, 1. Bd. 1922, S. 7.)。ヒルデブランド(Hildebrand)の学説に於ける用語としては、其の中の物々交換を指していることは明かである。然し経済生活の、最初の段階は、実に交換のない時代であつて、各人は主として自家の爲めに生産し、消費することを常とし、交換を中心とせない所謂自足経済(Selbstgenügsame Wirtschaft)である。一家の生産するところと他家の生産するものとが互に交換されることが常態となるのは、更らに一歩進んだ段階の現象である。かく見れば、先ず自足経済と交換とを分ち、後者の前段階として自足経済を認め、然る後に交換経済時代を続かしめ、更に之を区分することが正しいと思われる。前のリスト(List)の所説にしても、又此のヒルデブランド(Hildebrand)の段階論にしても、何れも社会的、職業的分業と交換流通とを基礎とする、現今の国民経済に類するものが、既に経済發達の初期状態にも存在していることを前提とするのであつて、人類が経済を営んだ当初からして、国民経済的と言ひ得る、生産物及び役務の交換形式を持つていたものであると説くのである。此点に就ての、ビュヒアー(Bücher)の駁論は、次の様に展開されていることを、「今此の、両方の段階説の立て方を見るに、夫等は何れも『原始状態』(Urzustand)のみを論外として、他の、総ての時代に於ては、財貨交換を基礎とする国民経済の存在していたことを認容するものであつて、僅かに生産及び交換の形式が、時代の異なるにつれて、異っているのに過ぎないと云う仮定に立つのである。かくして経済生活の根本現象は、古往今来総ての時代を通じて、同一のものであることを固く信じて疑わないのである。従つて彼等の為し得る、一切のことは、過去に於ける、各種の経済政策上の法則並びに施設は、

各時代の生産又は交換の方法が夫々異つてゐることより起つたものであつて、現在に於いても亦、その状態にして変化するならば、法則も亦従つて変化せざるを得ないのであることを説明し得るのみである。

最近の総合的経済学説にして、歴史派の研究範囲より出でたるものにあつても、依然としてこの様な見解を抱持しているものが、多いのである。其は英国流の抽象的経済学説中に好んで採用されている全然純理論的歴史解釈と大差がないのである。」(K. Bücher: a. a. O. Erste Sammlung, 88-89)。ここに「最近の総合的経済学説にして、歴史派の範囲より出でたるもの」とあるのは、恐らくチューネン (Thünen) の所説を指すものであろう。其は此の引用文の、稍々後段に至り、スミス (Smith) 及びリカルドー (Ricardo) の、屢々論及した原始交換説を反駁して、「此の如き思想の傾向を有する学者を独逸に於いて求めるならば、其はチューネン (Thünen) であろう。

彼は其の孤立国の構成を説くに当り、全然流通経済の仮定から出發してゐるのである。彼の、農耕の段階にまでも發展してゐない種族にして、極めて遠隔の地帯に住める者さえ、尙お且つ常に中央都市に來り、その生産物を販売することを念頭に置いて経済を営んでゐると論ずるのである。」(K. Bücher: a. a. O. Erste Sammlung, S. 90) と叙せられてゐるに見て、明かである。チューネン (Thünen) が其の「孤立国」(Der isolierte Staat in Beziehung auf Landwirtschaft und Nationalökonomie, 3 Teile in 4 Abteilungen, 1826-1833) に於いて構想した仮想国なるものは、未開の原野に遮られて、他国の文明と交渉する処なく、国内の文明は同一にして、土地の豊度にも差異なく、国の中央に一大市場があり、之が原料品及び食料品の唯一の販路である。工業も此処に富まれ、採鋳、製塩は此の附近にあり、又舟航に適する河川なく、従つて商品の運搬は皆車により、道路、交通機関、住民の文化程度、交通に関する技術等何れも等しく、経済組織の変更に自由に行われる国を仮想する。今斯くの如き仮想国に

於ける生産物の価格は、中央市場に於いて決定せられ、他の事情にして等しければ、市場に近き生産者の純利潤額は市場との距離、即ち自己の運搬費と市場より遠き生産者の運搬費との差額に依つて決定される。従つて市場との距離の増加は、同一距離に於いて価格の低落と同じ作用を及ぼすものであるから、運搬費が市価と同額に達するときは、穀価が変動なきものとすれば、市場に対する生産は止まるのである。然し市価は、生産費を償うて尙お生産者の純収益を余さなければならぬから、農耕は右の地点よりも一層都市に近い個所で止められ、斯くして都市の近傍に於いては、価値に比して容積、重量共に大なるか、又は新鮮を要する物の生産が行われ、都市を去る遠き地方に於いては、価値に比し運搬費の低い物が生産されると爲し、斯くして生産の行われる経済圏を五個の地帯に分つてゐるのである（拙著「交通と資本主義」改版四八―九頁）。此の、チューネン（Thünen）の「孤立国」の構想は、経済状態の、最も原始的な段階に於いても、すでに交換、流通が普及していることを、其の前提としての所説である。

上述し来れる諸学説は何れも、古典的経済学の採用する演繹法の中に頻出する原始人に就いての所見であつて、經驗的方法に訴えて得られたものではないのである。然るに原始人に就いて考うる、一切の特質は、之を實際に接して得來るものでなければならぬ。而して此の原始人の特質は、彼の文化を欠ける人類の生活しつつある實際的条件を示し、彼等が行動し、思惟する動機を明らかにするに相違ないであろう。然し彼の演繹的方法は此処に述べた帰納的方法に比すれば容易であつて、大抵の文明人は自己に固有なる見解や感じを原始人の精神中にも同様に存する様に見来らんとする傾向が極めて強く、而かも是等文明人の能力は此の点に就いては著しく貧弱であつて、彼の原始人の發達してゐない精神生活を充分了解して、其の深奥を解明することは、殆ど望み得ない

処であらう。

此の点に関して、ビュヒアー（Bücher）の所説の一、二を次に紹介して置かなければならぬ。先ず其の一は「国民経済の成立」の第一集の巻頭に掲げられた「原始時代の経済状態」と題する論稿の最初に書き出された「経済性」（wirtschaftliche Natur）に関する考察である（K. Bücher：Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 3 ff.）。

彼は次の如く云う、「従来の経済学は何れも、人間には他の生物に存せざる『経済性』（wirtschaftliche Natur）なるものが固有であると云う仮定より出發している。而して其の経済性なる仮定より、欲望の充當を目的とする人間一切の行為を支配する一原則、即ち所謂経済的本則（das ökonomische Prinzip）なるものを演繹して曰く、人間は時の古今を問わず、地の東西を論ぜず、最少の費用（労費）を以て最大の充當を得んことを努めるものである（最小手段の原則 Prinzip des kleinsten Mittels）」と。（中略）

實に従来の経済学説の総べては、かかる仮定の下に立ちつつあるものである。即ち一切の経済行為は此の仮定に合理的基礎を有し、高尙なる精神能力を要求する行為なりと説き、従つて経済学は一種の経済心理学を構成することとなり、依つて以て模型的過程を律して、かの経済行為を説明せんとする様になる。従つて経済は人間に特有なるものなりと云わざる可からざるに至り、動物また経済を営むやと云う問題の如き、到底起り得可しとも思われなかつたのである。實に彼の本則によれば、経済性は絶対的の或るものにして、人間の本性より分離せしめ得可からざるものとなるのである。かく叙述し采つて、ワグナー（A. Wagner）の「経済学原論」中にある「経済性の基礎は人類の心身組織中に確立するものにして、少くとも人類の歴史に表われ来る時期に於いては、變化せざること外界の如し。」と云う説明が、引用されてゐる（A. Wagner：Grundlegung der politischen Oekonomie.

3. Aufl. I, 1, S. 82.) 而して更に下の如く続けられてゐるのである、「然し従来の經濟學者が、その行為よりし彼の所謂本則なるものを演繹し来れる文明人の間に於いてすら、彼の經濟性なるものが各人其強度を異にしていることは、多数の觀察によつて立証されてゐる処である。即ち勤勉な人と懶惰な者と、細心の人と輕卒な人と、節儉者と浪費者、是等の兩極端の中間に於いては、所謂經濟性なるものには無数の段階が存することを知らなければならぬのである。今、物に対して之を破壊することを以て快事なりとする幼児の態度を觀察し来るならば、彼の所謂「經濟性なるものは各人各個に日々新たに習得せられて行くものであつて、各人に対する教育、慣習の結果であり、従つて各人夫々其の心身發達の異なるが如くに、其の經濟的本性なるものにも亦、著しい程度の差が存することを容易に知り得るであらう。

かく觀察し来れば、抑々人類には彼の「經濟性」は生得のものに非ずして、習得の結果ではなからうか。又人類進化の初期に於いては、吾人が動物に就いては常に仮定してゐる様な、純然たる、本能の欲望充當の時代の、幾千百年を繼續せるものと考へることが、果して不当であるか否かと云ふ疑問は、一顧直ちに提起せられ得べきもの、再思三考の余にして初めて生ず可き程の問題ではないのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 45.) 同様な論旨は本書の随處に展開されてゐるのであるが、第二講の「自然人の經濟」と題する章にも、次の様な記事が見出されるのである、「従来の學者は此の自然人を其の食糧獲得の方法如何によつて之を區別し、狩獵民、漁撈民、牧畜民、農耕民となしてゐたのである。而して同時に、又其は各民族が其の文明の發達に際して経過す可き經濟的進化の階級なりと信じてゐたのである。蓋し此の所論は彼等野蠻人は其の初め動物性の食糧から出發したが、漸く其の欠乏に圧迫せらるるや、植物性の食糧に移行するものであると云ふ

暗黙的仮定から出發しているのであつて、又植物性食糧を獲得することは、動物性の其に比して、遙かに困難を伴うものであると考へているがためである。而かも斯く觀察し來つた所以のものは、牽獸又は人工の機械、道具等を使用している処の、我々歐羅巴人の農業を見て、以て直ちに推論した誤見に基くものと云わなければならぬのである。

斯くの如き解釈は、其が出發している仮定の誤謬なるが如く、又間違たるを免れ得ないのである。凡そ經濟は其の出發点を食糧獲得に有しては疑う可からざる處で、而かも此の食糧獲得は飽くまで其の土地に於ける天産物の分布如何によつて決定されていることも亦、論ずる余地がないのである。斯く觀れば、人類は其の初めよりして已に植物性の食料を食してゐたものと云わなければならぬ。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 42-43.)

要するに氏としては經濟の發展を考察するに當つては、終始一貫進化論的基盤に立脚するものであつて、其の、最も明白な主張は次の所説に伺われるのである、「吾人は個人的食料探索の時代が終つて、經濟が始まるに至つたと云う、一定の時期を劃することの極め難かしいことを、信ぜざるを得ないのである。抑々人類進化の歴史に転化点とでも云い得る様なものが存している訳ではないのである。一切万事は、草木の其の如く、萌え出でて何時の間にか萎れて行くものである。『斯くの如きものよ。』と説きつつあることも、実は自然と人間界との奇蹟を吾人が鈍き眼に解しよからん為めの抽象に過ぎないものである。經濟とて、何で其と異り得よう。寔に其は絶えず移り行く變遷の渦中にあるのである。故に其の初めて歴史に表われるや、經濟は或る一定行為の規範により指導せられる処の、物質的の生活共同体として現われ来るものであつて、此の生活共同体は家族と云う人

的、道徳的の生活共同体と密接な關係に至つてゐるのである。」(K. Bücher : Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 30.)

斯くの如く広く人類全般に亘つて進化と云うことを考える際、元より文明人と自然人の間に区別の認む可きものなく、そのことは經濟に屬する一部の事實を考究するに當つても、假令文明人と自然人とを各別に取り扱つても、同様な過程を辿ることを立証してゐるのである。其の、最も明白な現われは、交通の發展に關する、氏の考察方法である。「國民經濟の成立」第二集の第七篇には、既述の如く、「交通」(Der Transport)と題する論稿が収められてゐるのであるが、其の中で交通の發展を概観するに當つて、自然人の場合と文明人との場合とを分ち考察して、先ず自然人より始めて、次の如く述べてゐる。「自然民の間に於いて恒久性のある交通制度とも見る可きは、一般に唯通信制度があるばかりである。然し之とて、經濟上の基盤の上に立脚するものではなくして、公的權力の上に立脚し、主として政治上及び戦争遂行の目的に資するものである。かく觀れば、自然民は一般に交通組織を政治上の制度としてのみ知つて居り、之を一層具体的に表現すれば、君主の權力を行使する手段として解してゐるもので考える可きであらう。

自然民族にあつては、交通は大体に於いて公の出来事(öffentliche Angelegenheit)である。彼等にあつては封鎖的在家内經濟が原則であるからして、商品の輸送と、而して財貨の交易の爲めにする旅客交通及び通信交通は、唯例外の場合に於いてのみ發生するに過ぎないのである。交通路は陸上にあつては、人間の足蹟が之を踏むに至つた個所にだけ、存在するに過ぎないのである。然し是等は二個の、相互に隔れる地点間の、最短の連絡を作るとを旨して計劃されてゐないのである。どの障壁も廻避され、而して若し例えば一本の、伐り倒された樹木が

其の方向を阻止しているならば、次の様なことが経験されるかも知れないのである、即ち其の踏み分け道は尙ほ数十年後と雖も其の個所に、仮令その障碍物が久しき以来腐朽によって粉碎されてからでも、一の回線を成しているのである。斯様な訳であつて、例えば阿弗利加に於いては、どの担夫隊商も一列縦隊となつて年々踏み分け路の上を進行し、恐らく可能な便宜への著想だけでも、浮び上ることはないのである。陸上交通を容易ならしめる、唯一の人工的施設は、屢々一本の樹幹から成り立つている処の、原始的な橋であり、又は河川を渡る個所にある渡船である。

自然自体が水 (Wasser) に於いて交通路を自由にせしめる様になつた個所にだけ、交通手段 (Transportmittel) を作成することが著想されるに至つたのである、是等の交通手段は一般に艇の構造以上に出るものではない。然し又一面に於いて是等の水上交通機関は、交通手段として考えるよりも、多分にむしろ生産手段として解す可きであらう。是等は漁獲、海賊、戦争に役立ち、而して殆ど個別的には人間輸送及び通信伝達に対しては意義を有しないのである。

吾人が吾人の文化諸民族 (Kulturvölker) の間に於ける交通制度の発端に就いて知っていることは、何等之と異なる特徴を帯びていないのである。自然の水路 (Wasserwege) が意のままになり、而して人間は唯船舶だけを建造する必要あるに過ぎなかつたが、一方自然が動力を自から提供した処の、かかる地方に於いてだけ、若干の進歩に到達して来たのである。メソポタミヤ、埃及、フェニキヤ、希臘羅馬の世界的地位の如き、舟航に適する河川及び内海の歴史的意義は、「このことに基くのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. II. 16. Aufl. S.

「国民経済成立起源論」第二集の巻頭を飾る論稿は、既述の如く、「贈与、貸与及び招請労働」(Schenkung, Leihe und Bittarbeit)と題する一篇であるが、第一集の、「第二篇に収録された、「自然人の経済」(die Wirtschaft der Naturvölker)と題する論文にも、随処是等の問題が取り扱われているのである。先ず贈与及び貸与に關しては、前記「自然人の経済」の中では、次の様な説明が展開されているのである、「従来の学者がその交換の成立を説くや、余りに無雑作の憾なき能わず。思うに彼等に取つては、其は或いは無理からぬことであるかも知れない。即ち彼等は今日の文明人が其の使用せんとするものを、如何なるものでも、市場若しくは勸工場につき、貨幣を以て何時でも、之を入手し得る処の現在社会の狀態に囚われていることから起る所見である。然し自然人の狀態は大いに其と異なるものがある。彼等には文明人との接觸以前に於いては、価値と云い、価格と云う如き觀念は全然没交渉であつた。初めて濠太刺利亞を發見した人々は、大陸に於いても、又其の附近の島嶼に於いても、土人は交換と云うことに就いては、何等の概念をも持つていなかったことを經驗し得たのである。即ち彼等に裝飾物を与うるも些の顧みる処無く、強いて贈物を与えたが、後に至つて、其等のものが何の容赦もなく森林中に抛棄してあつたのを發見したと云うことである。

斯かる事情あるにも拘らず、其の各種族間には活潑なる交通が行われ、土器、石斧、懸床、木綿絲、貝殻を綴れる頸鏈及び之に類する物品が交換されているのを見るのである。而かも既述の如く、交換なく、又商業の存するなくして、其は果して如何なる道程を辿つて行われ得るであろうか。

此の謎に対する解答は簡單である。即ち其の財貨移転は贈与と云う道を取り、又時によつては盜奪、戦時鹵獲、調貢、罰金、賠償、賭博上の利益と云う形に於いて行われているのである。同一種族各員の間には、食料品

に就いては、殆ど共産制が行われているのであって、家畜の一頭を屠殺する際、之を隣人に告げず、或いは食事をなしている際、通り掛りの旅人を招待せないことは、窃盗と同様に考えられているのである。如何なる人でも随意に他の人の小屋に入つて、食事を乞ひ得るのであって、家人は之を拒絶する訳には行かないのである。凶作の場合には、全村を挙げて其の隣村に就いて、暫くの寄食を乞ひ得るのである。道具、器具に就いては、貸与と云う一般的習慣存し、其は一種の義務たるが如き観をすら呈しているのである。土地に対しては、特別所有権の成立を見ることが出来ないのである。各家族何れも同一の物を生産し、飢饉に際しては相互に扶け合う処の、是等の種族の間にあつては、過剰の貯畜物は之を消費する以前に、其の利用の途を発見し得ないのであつて、特殊の報償を得て財貨を一つの経済から他の経済へ移転させ得るが如き動因は、一として存在せないのである。尤も女子購入の場合とか、医者、誦歌者、舞踊者、樂人等の、特殊な職を営む、若干の人々に対する贈物贈与の場合とかは、其の例外を為すものである。」(K. Bücher: *Entstehung d. r. Volkswirtschaft*. I. 16. Aufl. S. 61-62)。

次に招請労働に關しては、先ず自然人の間にあつて、男女両性の間に行われている職能分割を叙し終つて、更に下の如く続けられている、「吾人は此処に、此の独得の姿を表わしている、家内経済の二元論 (Dualismus der Hauswirtschaft) を詳述しいることを許されないのである。然し此処に一個の注意すべき事実がある。即ち斯く労働が家族の各員の間に分割されていることは、経済生活に必須なる、総ての要求を満足せしむ可く極めて不十分なるものがあると云うことである。此処に於いてか、先ず出現し来れる事柄は、一軒の家の力では到底為し果たし得ざる労働を為すに當つては、隣人の手伝いを乞ひ、又は村全体相拳つて、村全体の仕事を為すと云うこと、之れである。阿弗利加に於いて畑地を得んとして森林の開墾を為し、猛獸を捕獲せんとして鹿柴、陷阱を設け、

又は象狩を為さんとする時、ポリネシア (Polynesia; Polinesien) に於いて大漁網を編み、大家を建て、共同竈にて麵麩果を焼く時など、何れも皆斯くの如くするのである。而して氏族制度の行われている処では、其の制度によつて家族の労働力を増大し得るのであつて、斯様にして単独の力では當むことの出来ない仕事を果たし得るのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 56.)。尙ほ招請労働に關しては、氏の所謂封鎖的家用内経済の特徴を叙述するに當つても、次の如く説明されているのである。「かかる、大なる氏族団体に於いては、労働の共同及び分配はかなり広い範囲で行われ、夫妻、母子、父祖父等と云うが如き各群は生産と家計とに於いて各自特殊の任務を担当し、各個人は其の得意とする技倆を揮つて其の氏族全体の仕事に携わると同時に、其処に又参与することを許さざる制限もあつたのである。兄弟の友愛、子弟の聴従、長上に対する尊敬、従属、従順等の如き諸々の感情は、此の氏族団体に其の發展の頂点を見ることが出来たのである。氏族は其の氏族各員に代つて負債及び贖金を支払い、各員の蒙つた侮辱に対して復讐をなすのであるが、一方氏族各員は其の氏族に自己の全生涯を捧げ、独立の感情一切を拵けて、之を犠牲に供しているのである。

然るに斯かる感情の烈度が漸く衰えて来ても、其処に直ちに特殊経済に立つ近世的小家族が生れ出でるであらうと断するのは、早計である。蓋し斯かる近世的小家族にして現われんか、其の当然の結果として経済的給付の薄弱を来たし、自主的家用内経済の例潰を誘致するに至り、以て以前の野蛮状態に復帰するを免れ得ないであろう。此処に之を避けんが為めに、二個の手段を生ずるに至つたのである。

其の一手段は即ち小家族の手では為し遂げ得ざる経済的任務に対して、彼の、古いままの大氏族団体を部分的機關として、維持保存して置くことと云うこと、之れである。其は共有財産及び其の共同使用と云うことに基いて、

部分的共同経済を形成し、以て各々各別に経営する時は不経済な労力浪費に陥るが如き仕事（例えば田畑の見張り、家畜の番）に当るのである。之ばかりではなく、其の地方団体に属する各戸の家政に平等に關係してゐることではないが、一族の手で之を営むには余りも困難である経済的任務、例えば家屋の建築、舟の建造、森林の開墾、疏水灌漑、大規模の狩獵、漁撈、或る季節を限る手伝いの場合に於ては、所謂招請労働（*Britarbeit*）なるものが採用されているのである。其は家父に招かれた、近隣の人々が相集つて、有志の一次的協力を為すものであつて、仕事終れば再び解散して了うのである。斯種の多数は、後世種々に變形されたが、中には又其の儘残留しているものもないではない。彼のスラヴ種族の間に、現在行われている共力、即ち露西亜人の間のアルテル（*Artel*）、勃我利人の間のチエツタ（*Tscheta*）又はドウルツィナ（*Druzina*）、塞耳比亞人の間のキバ（*Moba*）は、実に其の遺風であつて、家屋を建てる時、羊毛を截る時、麻の收穫等に独逸の農民が相互に助力し合う習俗のあるのは、又偶々之が痕跡を物語るものではないか。

斯くの如き事情の下、此の施設にして如何に広く行われ得ようとも、其に依つて充當されている需要の部分は比較的僅少であるから、其は毫も各戸の経済的自主自存性を害するものではないのである。之れ恰かも今日我々の農民間に、自己生産の行われつつあるにも拘らず、其は寸毫も流通経済たることを妨げるものに非ざることと、同様である。況んや彼の一時的共力は、決して企業に非ずして、直接的需要充當の設備に外ならないのである。今日甲の手伝いを為すかと見れば、明日は乙を援けると云う有様であつて、其の共同的労働によつて得る結果は、特殊経済上の使用に供せられるのである。特に代償を支払うて行う交換に至つては、吾人何処にも之に接し得ないのである。彼の印度村落に見る如き、若干の工業労働者が、我が田舎の村備牧者の其の如く、村備職人

として存在している地方に於いても、彼等に給するに代償を以てすることを得ないのである。彼等は村邑全体の人のために労働し、村民全体より養われているのである。

大氏族制度崩壊の結果生れた欠点を補う為めの、第二の手段は、人的的に家族の範囲を拡張することである。血属関係のない、他の要素を取り入れ、其を家族中に編入することであつて、此処に奴隷制度と家人制度とを生ずるに至つたのである。」(K. Bücher: *Entstehung der Volkswirtschaft*. I. 16. Aufl. S. 96-98.)

以上、第一集の各処に散見する、贈与、貸与及び招請労働に関する所説を摘録、紹介したのであるが、既述の如く、第二集の巻首には、「贈与、貸与及び招請労働」と題する論稿が収められ、此処では是等の問題が行爲を主題にして展開されているが、論旨は大體に於いて同様である。唯特に注意すべきは、此の論稿の緒言に於いて、簡單乍らも次の様な一節が読まれることである、「招請労働だけは個々の経済的任務にあつては、田舎で變化されずに維持されて来たのである。実に招請労働は次の様な点に於いて一種の気高さを経験するに至つたのである、即ち一軒の家族に其の扶養者が缺けている場合、屢々隣人が義侠的な大量労働に於いて、夜間に一の、必要な田仕事を果すのである。斯様にして此の場合、人心の、善い性質が再び光輝を發し、その効果は無償の補充の、三個の形態の中で(筆者註・是等三個の形態とは此の引用論稿の対象たる贈与、貸与及び招請労働を指す)、其の外観よりもより遙かに広い範囲に於いて、可なり古い時代に対しても亦、承認され得るであろう。倫理は然し乍ら又経済生活に於ける、一の力である、而して若しも倫理が吾人の経済生活から完全に排除され得たと仮定するならば、吾人の将来は悪性の状態へ置かれることになるであらう。」(K. Bücher: *Entstehung der Volkswirtschaft*. II. 8. Aufl. S. 26.) 此の緒言に見ても分る如くに、氏も亦一般に歴史派経済学者に認め得る様な、倫理主義に立脚し

ている経済学觀を抱持していたことが推断出来るし、更らに其の、他の誰もが追隨を許さない、人類学的材料の、巧妙な取り扱い方によつて、縦横に論証した、原始経済状態の自給自足性から現今の流通経済状態への、悠久三千年に亘る進化の理念が、明白に吐露されているのである。而して氏が本書の到る処に論及している進化の意義、内容を最も明白に一括して表現した部分は、第一集・第三講の「国民経済の成立」中に説かれた、次の一節である、「国民経済とは一国民の欲望充当を目的とする施設、設備、手續の總体の相集まつて形成されているものである。此の国民経済は、更らに多数の各個経済に分れているのであるが、斯く分れた各個経済は何れも皆交換流通によつて相互に結合せられ、極めて錯綜せる關係に立ち、相互倚り相扶けているのである。

斯くの如く各方面に対して相互關係に立ちつつあるものであるから、国民経済は吾人の後に横わたる文化發展の結果であると、言い得るのである。而して彼の個別経済が、其の私経済たると、公経済たると、又其に直接從事している人員の大なると、小なるとに論なく、何れも變化す可きものなるが如く、此の国民経済も不斷に變遷の渦中に存するのである。又国民経済への、一切の現象は、史的文明的現象である。今や此の国民経済的現象を科学的目的の爲めに概念的に研究し、其の一貫せる規則に基く過程を明白ならしめんと欲するならば、此の国民経済の特徴及び其の變遷の法則は決して絶対的性質を有するものに非ず、従つて其は總の時代を通じ、又總ての文明状態を一貫して適應さるべきものに非ざることを、先ず知つて置かなければならぬのである。（中略）而して此の任務を遂行す可く、其の材料として吾人は歐羅巴文明人の経済史を取らなければならぬのである。蓋し歴史研究によつて遺憾なく解明されているのみならず、又其の經過中強力なる外的妨害の爲めに軌道を逸脱せなかつた進化の行程を示すものを求め様とするならば、此の歐羅巴文明人の間に於ける経済的進化を描いて他に求める

ことが出来ないからである。然し乍ら吾人は此の歐羅巴文明人の間に見る進化行程を以て停止、逆転等を験せずして、常に向上しのみ来りしものなりと断ずる程に、無謀ではないのである。(中略)

彼來の研究法の不完全であつたことを最も明かに認め得るものは、旧き時代の經濟、或いは文化未だ開けざる民族の經濟に対して、現代の文明人の經濟方法を區別する特徴を与うるの方法、即ちこれである。此の特徴を与えると云ふことは、所謂進化の段階を立定することであつて、其の各段階に附したる名称によつて、經濟史的進化段階の様相を暗語式に表現することである。

此の如き「經濟的段階」を立てることは、學問研究上缺く可かるざる手段であつて、之は經濟學説が經濟史的研究素材を活用し得る処の、唯一の方法を供するものである。かかる經濟的進化段階は、彼の歴史家が其の材料を分類する時代分けとは、之を同一に見ることは出来ないのである。歴史家にあつては、一時代内に生起せる重要事項の一切を挙げて数え尽さなければならぬものであるが、理論家にあつては、即ち然らず。彼が立定する段階説なるものは唯正常の事項のみ之れを表現す可きものであつて、偶發の事項は之を過眼し去り得るのである。彼の、一切の經濟現象と經濟設備とを生じ來る緩漫にして數百年以上にも渉る時代變遷に際しては、或る地方に於いては駸々乎たる進歩をなしているにも拘らず、他の地方にあつては其の發達の極めて遅々たる状態を呈しているのは、實際に於いて決して稀有の現象ではないのである。

かかる變態現象は、歴史家に取つては、特に重要なものであるかも知れないが、理論家の將に努む可き処は之と大いに異り、總体的進歩を其の主なる分位によつて解釈すると云ふことを以て主眼と爲し、あらゆる現象の、生滅流転する処の、彼の所謂過渡時代なるものは、之を少しも顧慮する必要がないのである。故に文明の理論家

の爲す処は、其の一貫せる形相を確立することであつて、更らに之を卒直に云わば進化の法則を発見することであると断言し得るのである。

然るに従来の企図は果して如何であつたであろうか。彼等は到底事物の本質に透徹することが出来ずして、徒らに其の皮相にのみ停滞するの愚を敢えてして来たのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 85-88.)

以上、氏が本書の各処で説き及ぼしている進化と云う觀念は、事物が時を経るに随うて変遷する意味であつて、其の研究対象となつてゐる経済社会も亦、決して一定不変のものではなくして、絶えず進化し発展して止む処なきものである。而して現在が過去の所産であると共に、将来を生むの母であることが強調せられ、即ち変化と同義であつて、必ずしも進歩向上すると云う意味ではなく、退歩逆転と云うことも亦、一種の進化であると思ふのである。従つて前段階の余習、余風又は残響とも云う可きものの重要性が強調せられることにもなれば、或いは曾ての理想状態が時代かが経過すると共に逆転、退嬰した一面も、之を認めなければならぬのである。此の、後の場合を最も端的に表現したものは、第二集中の「森林と経済」と題する論稿の、次に引用する結語であると思ふ、「独逸に於ける森林所有権の現在分布は、一の、長い歴史的発展の所産であり、此の史的発展の中には、一面権力と政略とが其勢力を逞うしたが、他面不注意な点があり、又先見の明を缺く処多く、屢々所謂「国民の相続物」が個々の、良心のない権力者に移行するに至つたのである。曾ては森林所有権者の利害が一国人口の利害以上に置かれたこともあるが、今や時代と共に国民の見解も動揺するに至り、多分将来一人の経済史家が現われ、彼は林業の歴史を鋳業の歴史と同様に取り扱い、両事業を以て、現在ではより少数の人々を恵む処の、国民

の略奪物なりと認識するであろう。」(K. Bücher : Entstehung der Volkswirtschaft. II. 8. Aufl. S. 60.)

以上、各方面から引用、紹介した、氏の論旨を綜合して判断すれば、第一集、第二集何れも夫々の巻頭に、自給自足を主要形態とする原始経済状態に関する研究が収録されている主旨が、充分付度出来るであろう。而して其の所謂自給自足状態は交換絶無の時代を示すのではなくして、交換が未だ経済生活上重要な地位に立つに至らない時代を指すに過ぎないのである。近時に於ける民族学的研究の結果によれば、幼稚な自然人の間にあつても亦、贈与、進貢、賠償、盜奪等の手段により、又或いは進んで交換の方法により、同種族間に或いは異種族間に財貨の移転が行われていることが明かにされたが、問題は当初からかかる交換を目的として生産するを常態となすか、又或いは大体に於いては自給自足を目的となすかによつて決定されるのであつて、ビュヒャー氏(K. Bücher)の所謂自給自足時代は交換絶無の時代を指すのではなくして、交換が未だ経済生活上重要な地位に立つてゐない時代を示すに過ぎないのである。之れパンコウ氏(Panckow)が交換の事実が最も低い發展的阶段に於て存することを認めながらも、原始経済組織の重心は貨物交易の缺乏、或いは純欲望充当生産(Die reine Bedarfproduktion)に存すとなし、ビュヒャー氏(K. Bücher)の封鎖的家内経済の意義を承認した所以である(Panckow : Betrachtungen über das Wirtschaftsleben der Naturvölker. Zeitschrift der Gesellschaft für Erdkunde zu Berlin. Bd. XXXI. S.179.)

而して此の自給自足経済の段階が何時頃迄継続したと見る可きか、此の点に就いて最も明白に氏の論旨を伺ひ得るのは、莊園経済に関する、次に掲げる、其所説である、「此処に於いて吾人は断乎たる結論に到達す。曰く領主と領民との間の経済的關係は、假令其が給付と反対給付と云う一般の見解に立つてゐるとは云へ、現代の流

通経済より生じた経済的法則からは全然遠去つてゐるものであること、之れである。莊園経済に於いては、決して特殊の有償なるもの無く、其の存するは唯一般的有償のみである。従つて価格無く、労賃無く、借地及び賃貸の利子無く、資本利潤無く、企業家無く、賃銀労働者無く、実に一種獨得の経済的経過、経済現象であつた。彼の所謂歴史派経済学は之を解釈す可く、能く何等の權威をも有するものに非ずして、唯徒に其の当時の経済的経過及び経済現象は全く法律によつて支配されていたとの歎声を繰返すの愚を学ぶに過ぎないのである。

此の莊園経済より生ずる余剰は一切挙げて領主の手に収められるのである。然し其は徹頭徹尾消費財であつて、決して長く之を貯え、又或いは之を資本化せしめることはないのである。其が帝室領のものである場合には、帝室の用に供せられることが常である。即ち其の方法は帝王其の臣下を従えて王城より王城へと巡狩して、其の行く先々に於いて蒐められた財貨を直接消費するのである。寺領若しくは貴族の大領地の余剰財貨は之を家人の手によつて営まれる、秩序ある運送によつて首都に送られ、此処で消費されることが原則である。

かかる事情の下、此の莊園経済に於いては、度量衡、旅客報告、貨物の運搬、旅舎制度、貨物及び役務の譲渡等、多種多様な交易交通現象があつたけれ共、是等一切の現象は現代の流通経済上の交換交通の特徴である処の、各個給付には必ず反対給付を伴ひ、取引を行う経済、単位相互間には自由なる自定が行われると云ふことを全く缺いてゐるのである。要するに、其は政治關係であつて、契約關係ではなかつたのである。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 107-108.)

人類の文化發展の迹、過去悠久三千年の大半以上の時期を占める自給自足の経済状態は、此の、中世の前半を蔽う莊園経済時代迄継続するものであることが説かれ、中世の後半に至り、都府経済の段階に入るや、ここに初

めて流通經濟の萌芽が認められるとなすのである。即ち都府の發達と共に、家内經濟の如き生産共同形式は次第に解消して、商業先ず分離独立し、原始産業と工業とは其の初めには地方的に分立して、前者は田舎に、後者は都会に行われるに至つたのであるが、後には更らに一層の發達を遂げ、職業上工業と原始産業及び土地所有との關係は次第に分離独立し、手工業者中には組合を組織するものが現われて來たのである。中世の都府經濟の時代に於いては、この、統一ある綜合經濟が存在しては無くして、各地方に個々の經濟が存在し、各々独立せる組織団体を構成したのである。而して此の都府經濟の段階は、氏が其の發展段階を区劃する基準とした処の生産消費道程の長短から見る時は、三者夫々對等の地位を有する様であるが、氏が之と對照せしめた称呼、即ち交換者なき經濟、直接交換及び貨物循環の三者に就いて考察すれば、第一段階は自給自足の時代であり、後の二段階は何れも共に交換經濟の時代である。斯く見來れば、都府經濟の段階は第一の階段と本質的に區別さる可き、最初の時代であり、従つて最も重視さる可き領域であらう。此の意味に於いて、第一集には「五千年來の大都會の型式」、「中世都市の社会組織」及び「国内移住及び都市制度の文化史的意義」等の、都府に関する諸論稿が収載されている訳である。而して第二集には、比較的多く國民經濟的現象に関する論稿が収録されているのも、其の第一集との関連を維持しようとしたものと見ることが出来るのである。其の中でも特に「大量生産の原則」、「交通」、「商業」、「經濟上の広告」及び「消費」等の研究は、何れも國民經濟の成立、完成を前提としての所説である。然し氏が是等の論題を対象とするや、常に其の學說の基調を成す進化的立場より試みられていることは言う迄もなく、ここに挙げた、「消費」と題する論稿に於いても、其主旨とする処は大量生産の法則によつて生産が劃一化、規格化されても、人間の消費生活は各人の個性を尊長、發達せしめて行わる可きことが結論に

なっているのである。このことは第一集の巻首を飾る論稿たる「原始時代の経済状態」中の、次の一節を読むとき、直ちに首肯される処である、曰く「経済なるものを、民族の進化に遡って往古に及ぼして行くならば、遂には非経済なるものに化し去るが如く、労働も之を其の原始に遡らしむれば、遂には其の反対なる非労働(遊戯)となり終るものである。尙お其の他の、重要な、一切の経済現象にあつても、斯くの如き探求を続けて行くならば、多分同様な結果に到達するであろう。而して其の中にあつて、唯一つ永久にして不変なるものが存する。

其は即ち「消費」である。蓋し人類には何時如何なる処に於いても、欲望のないことはあり得ないのであつて、而して之を充たせしめないでは済まし得ないのである。然し人類の欲望なるものは、其が経済的に現われ来る範圍に於いては、自然的に前定せられているものは極めて小部分に過ぎないのである。即ち自然的必要より生ずる消費なるものは、其は僅かに食物に関するもののみであつて、その他に至つては、何れも文化の所産、人間精神の、自由なる創作的行為の結果なのである。而して之無くば、人類は永遠に球根を握り、果実を探す動物の状態を脱却し得なかつたであらう。」(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 29-30)。

以上を括約すれば、氏の経済現象、経済組織及び経済制度の考察方法は、飽くまで進化論的立場に於いて試みられて居り、其の第一集、第二集を通じて引用、参照されている文献を見ても、例えばシュルツ(Schultz)の「貨幣起源史綱要」(Entstehungsgeschichte des Geldes)が引用せられ(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 61)、又ラボック(Lubbock)の「文明成立論」(Entstehung der Zivilisation. A. Passow 訳)が参照される(K. Bücher: Entstehung der Volkswirtschaft. I. 16. Aufl. S. 15, 50)等、其の研究方法の一端を推知することが出来るのである。氏の、此の名著も、其の直訳は「国民経済の成立」とす可きであるが、仮令第一集の訳者・権田氏は

「経済的文明史論」と意識せられたけれ共、筆者はむしろ原著者の意図を汲み取って、「国民経済進化論」と云う標題を付し度く思っているのである。筆者は今回権田氏名訳の第一集に続いて第二集を邦訳す可き、正式の後継者たるの地位を彼地出版書肆より与えられたのであるが、此の名訳の後を果して完成し得るか、危愆の念に駆られつつも、近く公刊を期して日夜稿を急いでいる次第である。尙お此の機会に拙稿に引用した原文の邦訳個処は、権田氏の名訳によること多大なりし旨を附記し、感謝の意を表したいと思う。